子どもと築く、未来のしくみ

Plan
プラン・ジャパン

プラン・マンスリー・サポーター報告書

Spring 2015

2014年1月 ⟶ 2014年12月

発行：公益財団法人プラン・ジャパン

プラン・マンスリー・サポータープロジェクト

5つのカテゴリーの活動内容早わかりガイド

5つのカテゴリーで支援活動を進めている
プラン・マンスリー・サポータープロジェクト。
カテゴリーごとの活動のポイントを、3つの切り口でまとめました。
第1弾は、「障がいのある子どもたちの支援」です。

第1弾
障がいのある子どもたちの支援です。

今回は、
冨田佳代職員が
解説します

1 障がいのある子どもたちの実態は？
地域社会から疎外される子どもたちが多い

脚に障がいがあり、プランの支援を受けている子どもたち（トーゴ）

プラン・マンスリー・サポータープロジェクトの支援3カ国（インド、トーゴ、グアテマラ）をはじめ、多くの開発途上国では、障がいのある子どもたちへの理解が進んでおらず、差別や虐待が多いのが実情です。そのため、保護者が障がいのある子どもを家の中に閉じ込め、隔離してしまうことがとても多くあります。

障がいのある子どもたちのほとんどは、“見えない存在”として社会から疎外され、適切な治療やケアを受けることができず、地域の一員として社会に参加することができません。

2 プロジェクトはこれを目指します！
住民が主役の地域に根差した支援

プランのプロジェクトは、障がいのある子どもたちを探し出すことから始まります。すべての子どもが専門機関での治療を必要とするわけではなく、地域の医療機関や社会サービスを最大限に活用することが最初の一歩です。大切なのは、地域全体で障がいのある子どもたちを支える体制を構築すること。障害のある子どもたちを地域の学校で受け入れ、障がいのない子どもたちとともに学ぶ機会を提供する「インクルージョン教育」も、プランのプロジェクトの特長の1つです。

活動の主役が住民たちであることもポイントです。住民からなる「地域ボランティア」を活動のリーダーとして育成。障がいのある子どもたちへのケアや地域の住民への意識啓発を行います。

「インクルージョン教育」を目指し、受け入れ先の学校の障がいのない生徒にトレーニングを実施（グアテマラ）

3 こんな成果が出始めています！
希望を持てるようになった障がいのある子どもたち

「国際障がい者デー」に行われた意識啓発イベント（インド）

プロジェクト支援3カ国では、障がいのある子どもたちへの理解と支援が広がり、多くの子どもたちが適切な治療や社会サービスを受けて社会に参加できるようになりました。彼らはもう“見えない存在”ではありません。インドでは、障がいのある子どもたちが鉄道無料乗車サービスを受けられるようになり、グアテマラでは、地域の学校に入学できるように。そして、トーゴでは職業訓練を受け、生きる意欲を持てるようになりました。

保護者や住民の意識の変化も大きな成果です。障がいのあるわが子を恥ずかしいと思い、家から出さなかった母親が、積極的に子どもを外に連れ出しています。意識啓発を通じて、障がいのある子どもであっても、地域の一員として社会に参加する権利があることを理解できたのです。

世界中に約9,300万人と推定される障がいのある子どもたち（0～14歳）（※）。基本的な医療や社会サービスが不足しているため、適切な治療やケアを受けられず、周囲の無理解から、差別や虐待にあいやすいことも問題です。

※ The State of the World's Children,Unicef,2013

トーゴ「障がいのある子どもたちの支援体制作り」

実施地域●中部チャオウジョ県、ビリッタ県、東モノ県の計24村
実施期間●2011年8月～2016年6月
対象●障がいのある子ども約2,000人と地域住民、保健・教育・社会福祉分野の職員

障がいのある子どもたちを支える地域ボランティアの力

背景

トーゴでは、人口の約10%をしめる障がい者のうち、必要なケアを受けているのは約2%。多くの社会サービスが有料で都市部に集中しているためです。本プロジェクトでは、地域住民が主体となった障がいのある子どもの保健、教育、就業等の支援体制作りを推進します。今回は3年目の活動成果をご報告します。

障がいを持つ子どもの家族や近所の住民に対して意識啓発を行う地域ボランティア

今期の主な活動

●地域ボランティアの育成（56人）　●地域ボランティアの家庭訪問によるケア（1,624人）
●トレーニング実施　医療従事者（149人）、伝統医療従事者（75人）、教育関係者（328人）
●地域住民への意識啓発活動（1万8,378人）
●障がいのある子どもへの医療支援・理学療法（221人）　●学用品の提供（968人）
●障がいのある子どもへの職業訓練（142人）　●収入向上支援（1,072人）

障がいのある子どもたちを支えるのは、専門家だけではありません。プロジェクト後半に差し掛かった今期は、住民が主体となった地域ボランティアの活動に、多くの成果が見られました。地域ボランティアが、定期的に障がいのある子どもの家庭を訪問。子どもの症状に合わせた理学療法を実施し、スピーチセラピーや歩行練習などの機能回復訓練を提供。また障がいのある子どもの保護者や住民には意識啓発を行い、地域全体で障がいのある子どもへの理解と支援を広げました。

障がいのある子どもたちにとって、専門的な医療機関で診断・治療を受けた後、定期的なモニタリングとケアを受けることはとても重要です。地域ボランティアの家庭訪問により、多くの障がいのある子どもたちが安心して暮らせるようになりました。プロジェクトで継続的に育成してきた地域ボランティアの力が、着実に根づき始めています。今後も、支援体制を強化していきます。

Field Report | 久保田恭代職員（コミュニケーション部）

障がいのある少年に、1年間マッサージを続けた地域ボランティア

生まれつき脚に障がいのある5歳の男の子、アラザさんを訪ねました。彼の両親やきょうだいたちがアラザさんに、「この線の上をまっすぐ歩いて、お客人に見せてあげて」と言っています。地面の上に引かれた直線の上を一歩一歩踏みしめるように歩くアラザさん。そんな彼を温かく見つめる、地域ボランティアの女性がいました。この女性こそ、アラザさんがこうして歩けるようになった恩人です。彼女は、両脚のひざがくっついてしまい、歩行困難だったアラザさんに45分間のマッサージを週に3回、1年間続けました。そのかいあって、彼は今では「将来はサッカー選手になりたい」という夢を抱けるまでになりました。この活動のために彼女が受け取る報酬は何もありません。「近所の子どもが歩けるようになったという達成感、それが彼女の報酬のすべて」と、プラン・トーゴのスタッフ。

このプロジェクトの真骨頂は、「地域が一体となって障がいのある子どもを支える」という連帯感です。障がいへの偏見が蔓延し、義足などのクオリティは日本に比べて驚くほど低く、障がいのある子どもをケアできる施設はほとんどない。そんなこの国で、障がいのある子どもたちに寄り添い、自分の時間とエネルギーを無償で注ぐ人々は、地域が障がいのある人々の存在を受け入れる大きな力となっています。必要な知識や技術を伝え、彼らが自信と希望をもって前進できるように支えるのも、プランの大切な仕事です。

地域ボランティアの会合にて（右端が久保田職員）

紛争や災害に巻き込まれる子どもたち

武力紛争下の国や地域に暮らす子どもは 10 億人以上（※）。命を落とし、親を失い、戦闘や強制労働に駆りだされる子どもも。また、近年の記録的な大雨や台風、干ばつなども、子どもたちの生活や教育に打撃を与えています。

※ Progress for Children : A Report Card on Child Protection（No.8）, UNICEF, 2009

カンボジア「学校給食を通した子どもの栄養改善」

実施地域●シェムリアップ州、バッタンバン州、カンポントム州、オドーミンチェイ州
実施期間● 2013 年 10 月～ 2015 年 9 月
対象●対象校 1,064 校に通う全児童、教師、児童の家族をはじめとした地域住民

学校給食を始めて1年。中途退学率が減少。同時に課題も

背景

カンボジアでは1970年代、ポル・ポト政権下で医師や教師など知識層の多くが失われました。基本的栄養知識を持つ成人が少なく、子どもの多くが栄養不良の状態です。登校しても空腹で授業に集中できないため、成績が振るわず退学する児童が後を絶ちません。国連世界食糧計画（WFP）と連携して始めたプロジェクトの1年目を報告します。

改良型かまどを使って給食を準備する調理係

今期の主な活動

●「学校給食の提供（生徒14万8,063名）
●月10kgの米支給（4～6年生の子どものいる1万6,211世帯）
●奨学金支給（4～6年生の子どものいる3,282世帯）　●障がい児教育について教師研修（213名）
●学校菜園トレーニング（地方教育省職員297名、教師220名）　●スタッフ30名の採用、研修、配置

トレーニングを受けたスタッフが、新規3州の対象校を訪問して調理や食材管理を指導し、給食は軌道に乗りました。空腹を抱えて授業に臨んでいた生徒たちは、毎朝、温かい給食を食べて、授業が終わるお昼まで元気に学ぶようになりました。バッタンバン州教育省は対象校の中途退学率が8％（昨年度）から5％に減ったことを報告。これは、学校給食と並行して行った奨学金や米の支給、教師対象研修など、多面的な支援の成果です。

一方、問題も見えてきました。給食に時間がかかって授業開始が遅れ、カリキュラムが消化できない、という教師からの悲鳴です。生徒たちが元気になっても授業時間が短縮されてはいけません。また、2つの学校では食材の盗難が発覚。調査の結果、犯人は調理係と分かり、学校が損失分を負担しました。

プランのスタッフはより確実に学校給食が運営できるよう対象校の指導を強化していきます。

Field Report　山形 文職員（プログラム部）

研修を受けて担当スタッフのモチベーションもアップ

学校給食を導入して1年が経ちました。採用したスタッフは精力的に担当地域の学校をまわり、給食運営を中心とした管理指導を続けています。スタッフは基本的な研修を受けていますが、「健康と栄養」や「子どもにやさしい教育」について、より深い知識やノウハウが必要である、と追加の研修を求める声が上がっていました。そのため、外務省からの助成金を受けて2014年11月に1週間の研修を実施。テーマは「保健と栄養」「子どもにやさしい教育環境」「安全な食品管理」で、全担当スタッフ約30名がシェムリアップ市に集合しました。

各研修には教育省や保健省の職員を講師として迎え、WFP職員も招待しました。スタッフは普段はそれぞれ遠隔地で活動しているので、同僚に相談することも容易ではありません。スタッフ全員が集合して専門家から参加型の研修を受けるのは貴重な体験。どの顔も真剣でした。給食対象校の調理場を使った実習では、教わったばかりの知識を活かして積極的に改善案を発表。自らの経験を共有したり、担当地域での問題について全員で対応策を検討したり。みんなの明るい表情を見て、研修を実現できた喜びが湧いてきました。同時に、私たちプランのスタッフにも学ぶ機会が重要であることを再認識しました。

担当地域は違っても心をひとつにして地域の学校給食運営を支援します

今度は彼らが講師となって、同じ内容を対象校の代表に教えていく研修が始まります。

南スーダン「若者への就職・起業支援」

実施地域●中央エクアトリア州ラニャ郡、ジョングレイ州ボー郡
実施期間● 2012 年 7 月～ 2016 年 6 月
対象● 15 ～ 35 歳の若者約 1,200人、および教師など

インターンシップを通じて実務経験を身につけ、社会の即戦力に

背景

南スーダンは2011年に独立を果たしたものの、長年にわたる内戦の影響で若者は十分な教育を受けていません。多くの若者にとって就職は著しく困難で、失業による貧困が犯罪を増加させています。本プロジェクトは、職業訓練所の整備、職業訓練カリキュラムの見直しなどを経て、3年目の活動に入りました。

女性も男性に交じって自動車整備を学んでいます

今期の主な活動

● メディアや集会などを通じた若者の職業訓練所への登録呼びかけと地域住民への啓発
● 第 2 期・第 3 期訓練生の登録（501 人）と訓練（360 人）
● 卒業した第 1 期訓練生（237 人）に対する就業・起業支援（インターンシップ、就職斡旋など）
● 職業訓練コースに必要な備品の購入　● 訓練所教官への復習トレーニング

中央エクアトリア州ラニャ郡では、昨年見直された職業訓練カリキュラムを使って、第2期生と第3期生に対する自動車整備工、電気配線工、服飾、小規模起業、英語などの職業訓練を実施しました。第1期生を含む修了者に対しては、実社会で通用する技能を身につけるためのインターンシップを支援。修了者のうち41人はすでに就職するか、小規模事業を立ち上げ、経済的に自立し始めています。

また、地域住民への啓発により、女性の訓練所への登録者も増加。女性が占める割合は、第1期の22％から第2期は31％に伸びました。自動車整備工など、男性の仕事という認識が強いコースで学ぶ女性も増えています。

一方、ジョングレイ州ボー郡では、2013年12月に発生したクーデター未遂と、その後も続く武力衝突のため、職業訓練の開始が遅れています。当面はラニャ郡のみでの活動となりますが、状況が変わり次第、ご報告させていただきます。

Case Study　ピーターさん（男性、25 歳）

世界の技術の進歩に遅れないよう、常に自分を磨き続ける

ピーターさんは、自動車整備工、できるなら車の設計もするような、メカニックエンジニアになりたいという夢を持っていました。でも、父親が亡くなって授業料を払えなくなったとき、「もう僕の夢は終わった。エンジニアになるのはあきらめるしかない」と思ったそうです。ところがある日、教会で牧師さんがプランの運営する無料の職業訓練コースへの参加を呼びかけていたのを聞き、早速応募。合格したときは「本当にうれしかった」と振り返ります。

無事に自動車整備工コースを修了したピーターさんは、首都ジュバにある大手の自動車整備工場の見習い工になり、実践的な技術を学びました。見習い期間終了後、ピーターさんは、「私はここで多くのことを学びました。でも、自分の将来のためには、もう少し学び続けたいです」と話してくれました。「これで私の訓練が終わったわけではありません。世界の技術は日々進歩しています。その進歩についていくため、私はもっと自分の技術を磨く必要があり、それがよりよい未来につながると思っています」と、前を見すえています。

第1期生の卒業式には、訓練生の家族や地域の人々に加え、科学技術教育省の担当大臣も駆けつけ、盛大に行われました。このプロジェクトは、南スーダンの多くの人たちの期待を受けながら2016年まで継続します。

ジュバの自動車整備工場で

スリランカ「子どもの保護とケア及び地域社会への復帰支援」

実施地域●東部州バッティカロア県
実施期間● 2012 年 12 月～ 2016 年 6 月
対象●紛争の影響を受けた子ども約 2 万 6,000 人、およびその保護者、地域住民など

プロジェクトが効果的に推進されたことを中間評価で確認

背景

スリランカでは、約30年にもわたる内戦が人々の暮らしに重大な影響を及ぼしました。特に東部州での戦闘は激しく、紛争に巻き込まれた子どもたちは保護者を失い、教育の機会を奪われました。また、貧困により、暴力、性的搾取、虐待などのターゲットになりがちです。今回は2年目の活動の成果をご報告します。

中間評価で子どもたちから聞き取りを行う

今期の主な活動

●プロジェクトの中間評価　●関係者の能力強化（のべ 1,385 人）
●子どもへの意識啓発、子どもクラブの能力強化（のべ 1,309 人）
●リソースセンターの建設（4 カ所）　●保護者、地域住民への意識啓発（437 人）
●地域ボランティアの支援を受けた子ども（347 人）　●関係機関との連携

今期は、地域住民の強い要望により、子どもたちとその家族、地域ボランティアなどがともに学び、遊び、社会活動を行うためのリソースセンターを4カ所設置しました。子どもたちは、センターで読み書きを習ったり、スポーツなどのレクリエーションを楽しんだり、地域社会で生きていくために必要なライフスキルを学びました。センターは、子どもへの暴力や虐待の防止のための意識啓発の場としても活用されています。

また、今期は外部コンサルタントによるプロジェクトの中間評価を行いました。総括では、関係者、特に地域ボランティアの子どもの保護に関する知識が向上したことで、彼らの意識がポジティブに変化し、子どもの権利保護活動が効果的に推進されたことを確認。一方、課題としては、職業訓練を通じて子どもたちにより専門性の高い技能を身につけさせ、就業、起業に直結できるような体制を整備することが挙げられました。

Field Report | 佐藤活朗事務局長

平和という機会をつかみ、未来のために若い世代を育てる

2014年6月にスリランカを訪問しました。プロジェクトに参加するさまざまな年齢や立場の人々に接すると、「長い内戦のあとで実現した平和は大事、この機会をぜひ活かさなければ」という、共通の思いを感じます。

プロジェクトでは、プランが提供する訓練コースを修了した若い世代が「地域ボランティア」として活躍。貧困のために学校に行けなかったり、親が出稼ぎに出てしまって放置・虐待されたり、さまざまな事情で保護を必要としている子どもを発見、通報するなど、重要な役割を果たしています。若い世代が主体的に参加することは、戦乱でさまざまな被害を受けた地域の復興を助けるだけでなく、未来の地域リーダーを育てることにつながります。ボランティアたちの話を聴いて、それぞれが大きなやりがいを感じながら経験を積み、着実に成長していることがよくわかりました。

一方、行政が子どもの保護問題に持続的に取り組んでいけるよう、プランはソーシャルワーカーたちの育成と能力強化のための研修にも力を入れています。研修に参加した職員たちのコメントからも、平和への共通の思いが伝わってきました。ようやく平和が到来したスリランカで、子どもの保護を実現する大きな機会を、多くの人々が協力してつかもうとしています。

行政ソーシャルワーカーの研修会にて
（写真右端が佐藤事務局長）

世界では5～17歳の子ども約1億6,800万人が労働に従事し、健全な発育や教育の機会を奪われています（※）。強制・債務労働、子ども兵士、人身売買、子ども買春・ポルノなど、その形態も悪質化しています。

※ Making progress against child labour, ILO, 2013

エジプト「ストリート・チルドレン」

実施地域●北部アレクサンドリア県
実施期間● 2009 年 10 月～ 2016 年 6 月
対象●ストリート・チルドレン約 5,000 人、およびその保護者など

子どもたちの保護、そして社会復帰へと加速

背景

エジプト都市部に多いストリート・チルドレン。背景には貧困や家庭の崩壊、虐待等があります。本プロジェクトでは、ストリート・チルドレンの社会復帰を目指した支援と、新たなストリート・チルドレンを生み出さないための活動を推進。今回はフェーズ2、3年目の活動成果をご報告します。

職業訓練を終え、修了証を受け取る子どもたち

今期の主な活動

●ストリート・チルドレンの保護（1,650 人）と一時保護施設でのサービス提供（3,988 人）
●医療支援（619 人）　●出生証明書の発行や裁判などの法的支援（644 人）
●職業訓練（119 人）　●元の家族への復帰支援（18 人）
●ストリート・マザーへの支援（145 人）　●母親を対象とした啓発セッション（160 人）
●ソーシャル・ワーカーのトレーニング（22 人）　●預金貸付協同組合の利用（87 人）

フェーズ２プロジェクトも３年目に入り、保護されたストリート・チルドレンが社会復帰するケースも増えてきました。特にプランは、子どもたちの経済的な自立を支援するため、実績ある職業訓練校や職人の協力を得て職業訓練を実施。これにより、高い技能の習得と、安定した収入を得られる会社への就業が可能になります。今期も、職業訓練を修了したすべての子どもたちに、就業への道が開かれました。また、プロジェクトのソーシャル・ワーカーが、子どもの権利や家族の絆の大切さなどについて慎重かつ時間をかけて家族に話した結果、家族のもとに円満に戻る子どもも増えています。

今期はプランの取り組みがエジプト政府に高く評価され、政府や NGO によって運営管理される子どもシェルターの状況調査にプランが参加することになりました。また、国レベルのストリート・チルドレン対策プログラムの計画策定会議にも招集されることになりました。

Case Study | モハメッドさん（18 歳、男性）

父の暴力のためにストリート暮らしへ。未来を見出すまでの道のり

カイロで暮らしていたモハメッドさんは、小さい頃から父親に暴力を受け続け、顔や身体は傷だらけ。児童労働にも従事させられていました。母親は夫の暴力を恐れて失踪。モハメッドさんもついに家を飛び出し、アレクサンドリアへと向かいます。そこでは路上生活をしながら、行き交う人々を捕まえて宿泊できる場所を聞く毎日。そしてある日、プランが運営するシェルターを知り、保護されます。

シェルターの職員は、最初、身体中傷だらけのモハメッドさんを見てビックリ。すぐに精密検査と治療を受けましたが、幸いにも精神面にはひどい傷を負っていないことが分かり、モハメッドさんは勉強やスポーツに強い意欲を見せます。最初は読み書きを教えるレベルの補修校で学び、その後、見事に公立の正規中学校へ入学。今は3年生となり、期末試験で優秀な成績を修めました。スポーツでも、補修校のサッカー部に入るやいなや頭角を現し、全国大会でチームを準優勝に導く原動力に。最初は反抗的な振る舞いも見られましたが、サッカーでエネルギーを昇華させ、人間としての権利や義務、ライフスキル等を学んだ結果、穏やかで礼儀正しくなってきました。

モハメッドさんは先日、電気配線工の仕事を学ぶワークショップに参加。教官は、彼の飲み込みのよさに驚きました。常に前を向き、力強く生きるモハメッドさんに、明るい未来が待っています。

力強く自らの人生を切り開くモハメッドさん

HIV とエイズに苦しむ子どもたち

HIV に感染した 15 歳未満の子どもは世界に約 320 万人いると言われ、年間 19 万人の子どもがエイズ関連の病気で命を落としています（※）。母子感染や、エイズで親を失った子どもたちの保護も大きな課題です。

※ Epi slides from 2014 Gap report , UNAIDS

インド「子どもと女性を中心としたHIV予防とケア」

実施地域●北部ウッタラ・プラデシュ州マウー県、東部オリッサ州ガンジャム県、西部マハラシュートラ州プネー県
実施期間●2009年10月～2016年6月（2012年10月よりフェーズ2開始）
対象●妊産婦約15万人、若者約6万7,000人など

まずは知ることが大切！HIV検査は母子感染予防の最初のステップ

背景

インドのHIV陽性者は約250万人、毎年10万人のHIV陽性の女性が出産します。その3割が母子感染し、毎年、約1,400人の15歳未満の子どもがエイズ関連の病気で死亡するなか、HIV母子感染予防、HIV陽性者へのケア・治療、予防教育・意識啓発活動、法律相談などが必要とされています。今回は4年目の活動成果をご報告します。

地域の女性対象の意識啓発ミーティング

今期の主な活動

- 妊産婦（6万3,901人）と配偶者（1万4,290人）へのHIV検査
- HIV陽性者への心理社会的ケアと治療
- HIV陽性の子どもへの栄養治療（417人）
- 若者へのHIV予防教育（4万6,128人）
- 地域ボランティアの養成（600人）
- 地域の行政官・医療従事者への意識啓発活動

HIV陽性の妊産婦が感染の予防措置をとらずに妊娠・出産・授乳をすることで、子どもがHIVに感染する割合は20～45%。そのため、妊産婦と配偶者がHIV検査を受け、感染の有無を知ることが重要です。プロジェクト中盤の今期は、地域ボランティアやコミュニティヘルスワーカーによる意識啓発やカウンセリングを推進し、多くの人々がHIV検査を受けました。検査後はHIV陽性の妊産婦に予防薬を投与し、出産後には授乳指導を行いました。生まれてきた子どもにも、生後6週間から18カ月にかけて予防薬を投与。また、母親の免疫力を高めるための栄養管理指導も実施しました。HIV陽性の妊産婦とその子どもに対して一連の予防措置を行ったことで、大半の子どもたちがHIVに感染することなく健やかに成長しています。

HIVに感染していたとしても、事前に知ることで健康な赤ちゃんを産むことができます。今後も、意識啓発を通じてHIV検査を普及し、母子感染を予防していきます。

Case Study | チンキさん（仮名）

娘の健やかな成長に希望を見いだしたHIV陽性の女性

7年前に結婚したチンキさんはなかなか子宝に恵まれず、義理の両親から冷たくされていました。結婚から3年後、ようやく妊娠が確認されましたが、喜びもつかの間、チンキさんと夫がHIVに感染していることが分かったのです。ショックを受けた義理の両親は、チンキさんに中絶するよう迫りました。事情を知ったプロジェクトスタッフは、義理の両親を定期的に訪ね、予防薬を投与することで胎児への感染を防げる可能性があると繰り返し説明。やがて熱心なカウンセリングが実を結び、義理の両親は、孫の将来を憂いながらも出産に同意したのです。

スタッフは、医師たちと連携して予防薬を用意するなど、出産に備えました。その後、チンキさんは無事に女の子を出産。生後6週目にHIV検査を行いましたが、幸い結果は陰性。その後は娘とともに予防薬をのみ、生後6カ月目まで母乳を与えました。18カ月目に再度娘にHIV検査を実施。結果は…HIV“陰性”でした！　チンキさん一家はプロジェクトチームと喜びを分かち合ったのです。プロジェクトと病院が連携して適切な予防措置を行った結果、チンキさんの娘はHIV感染を免れ、健やかに成長。チンキさん夫婦も抗HIV薬を服用しながら元気に暮らしています。「この子は私の希望です。プランの支援に心から感謝しています」と幸せそうに語ってくれました。

出産後、HIV 陽性の母親へカウンセリングを行うプロジェクトスタッフ（左）

カメルーン「子どもと女性を中心としたHIV予防とケア」

実施地域●中部アダマワ州、北西州
実施期間● 2013 年 1 月～ 2016 年 6 月
対象●妊産婦・出産が可能な年齢の女性約 7 万 2,000 人、子ども約 1 万 2,000 人など

男性とともに取り組むHIV感染予防と産前健診

背景

カメルーンでHIVとともに生きる妊産婦は約3万4,000人、14歳以下の子どもも約5万4,000人います。妊産婦の多くは、HIV検査や母子感染予防サービスを受けていません。本プロジェクトは2013年1月の開始以来、順調に進捗しています。2年目の今期は中間評価を実施。活動の成果をご報告します。

プランスタッフの話を熱心に聞く男性たち

今期の主な活動

- 産前健診や HIV 検査受診をサポートする男性ファシリテーターの育成（42 人）
- HIV とエイズとともに生きる子どもたちへのサポート（1,142 人）
- HIV とエイズとともに生きる女性の生計向上支援（120 人）
- ショートメッセージサービス（SMS）による産前健診の連絡（妊産婦 3,462 人を対象に計 4,199 メッセージを発信）
- 意識啓発キャンペーン（計 968 回、5 万 4,766 人参加）

今期はプロジェクトの中間評価を行い、これまでの活動を振り返りました。成果としては、HIV検査と産前健診を受診する妊産婦の数が以前よりも増えたこと。課題としては、妊産婦のケアに対する男性の理解と協力が不十分であることが挙げられます。このため本プロジェクトでは、各地域でファシリテーターとなる男性を選出し、産前健診の重要性やジェンダーの役割に関するトレーニングを実施。ファシリテーター主導で男性グループを結成し、男性の協力の大切さを訴える啓発活動を推進しました。地域の長老たちは最初、難色を示しましたが、今では男性が女性の産前健診に付き添うことなどに理解を示すようになっています。

また、中学校の教師に対しては、ジェンダーや、性と生殖に関する健康の知識を深めるワークショップを開催。この学びは今後、生徒への指導に活かされます。

※ジェンダー
生物学的に決定されるものではなく、文化的、社会的に形成される男女の差異

Case Study | ムサさん（47 歳、男性）

男性を協力者に。変化を起こすまでの長い道のり

ムサさんは6人の子どもの父親です。地域の伝統やしきたりのもとで育ったムサさんは、「産前健診は女性だけの問題」と考えていました。「私たちの地域では、夫が妻とよく話をしたり、意見交換をしたりすることはありません。ましてや、夫が病院まで妻に付き添うなど、ありえないことです」。ムサさんの地域では、男女が肩を並べて歩くことや、男性が妊娠した女性と一緒に歩くことはタブーとされています。また、妻が病気でも、男性が代わりに家事をするのは恥ずべきこととされています。「でも、なぜそうなのか誰も教えてくれませんでした。父に尋ねても、ただ“そのほうがいいんだ”としか言いません」。

その後、ムサさんはプランと出会い、夫が妊娠中の妻をサポートすることの重要性を学びます。今では男性グループのリーダーとなり、グループの仲間と一緒に、妻の産前健診に付き添うことや、家事に協力することなどの重要性を啓発しています。「私たちを笑う人も確かにいます。でも、中には分かってくれる人もいるのです」とムサさんは言います。

今もムサさんは、「ジェンダーに関する伝統的な考え方が、女性の健康被害につながる」と周囲に訴え続けています。

ムサさん（左から２人目）がリーダーを務める男性グループ

理解されなくても屈せず、熱意と目標をもって進むムサさんのような男性たちの活動によって、地域の人々の意識にも徐々に変化が起きはじめています。

虐待される子どもたち

虐待の実態を把握することは困難ですが、毎年５億人から15億人の子どもが経験していると推定されています（※）。身体・心理的虐待、育児放棄、強制労働や性的搾取を目的とした人身売買など、その内容もさまざまです。

※ Progress for Children : A Report Card on Child Protection（No.8）, UNICEF, 2009

スリランカ「家庭・学校・地域での暴力防止」

実施地域●北西部アヌラダプラ、クルネガーラ、中部ヌワラエリヤ、マタレ、南東部ウェーラワーヤ、モナラガーラ
実施期間●2011年8月～2015年1月
対象●子ども約3,900人および保護者・教師など約5,900人

特定の地域で始まった活動が、国の政策へとスケールアップ！

背景

スリランカでは、長年にわたる紛争、海外出稼ぎによる親の不在、無計画な近代化により、子どもへの暴力や性的虐待が増加傾向にあります。こうした暴力は子どもの適応障害だけでなく、社会に暴力の連鎖を生む要因ともなります。本プロジェクトは3年半にわたる活動が完了しました。

病院内に設置された子どものケア施設

今期の主な活動

- 地域ボランティア（1,854 人）、子どもの保護委員会メンバー（607 人）、子どもの保護担当官（901 人）の能力強化　● 保護者への子どもの保護に関する意識啓発（1 万 1,672 人）
- 子どもへの意識啓発、子どもクラブの能力強化（1 万 7,213 人）
- 虐待事例の早期発見と子どもの保護活動、虐待予防活動
- 「子どもの虐待・放置対策」国家ガイドラインの刊行　● 関係機関との連携

今年度も地域ボランティアを中心として子どもの保護活動を推進するとともに、関係者の能力強化を継続して行うことで連携が強化されました。最終年度の特筆すべき成果は2点あります。1点目は、地域レベルで行ってきた活動が国の政策へとスケールアップし、「子どもの虐待・放置対策」国家ガイドラインの刊行に至ったことです。本ガイドラインは、保健、教育、司法、警察など、子どもの保護問題に係わるすべての行政機関と専門家との共同作業で制作されました。今後は、子どもの保護対策が効果的に推進されることが期待されます。

2点目は、保健省、児童・女性問題省の承認を得て、西部ガンパハ県の政府系病院の敷地に、虐待や放置された子どもを総合的にケアするための施設（24時間体制）を設立したことです。これまでスリランカでは、このような施設がなかったことから、今後は病院とも連携しながら、必要なサービスをタイムリーに提供する画期的なモデルとして、大きな役割を担っていくことが期待されます。

Staff's Voice　内山雄太 職員（プログラム部）

地域ボランティアの活躍がプロジェクト成功の牽引力に

本プロジェクトの成功は、プランが育成した地域ボランティアの活躍抜きに語れません。地域ボランティアは一人当たり最大20世帯を担当し、虐待事例を発見したときは警察署の生活安全課に報告し、対処について指導を受け、問題の解決を試みます。それでも解決が困難な場合は、子どもの保護委員会に虐待事例を報告し、同委員会は警察に介入を依頼。警察は、司法、保健医療、心理学の専門家などと協力し、保護された子どもの生活支援や心のケアなどを行うとともに、社会復帰を支援します。ここでもボランティアは重要な役割を担います。学校を中途退学していた子どもの復学を学校側に働きかけたり、基本的な社会サービスを受けられるよう出生証明書の発行を支援するなど、今では児童・女性問題省からも大きな信頼を寄せられる存在になりました。

「子どもの虐待・放置対策」国家ガイドラインの刊行も、数多くのボランティアの草の根レベルでの経験が反映されたからこそ、可能になったのです。行政が子どもの保護対策を立てても、それを実行してくれる人たちがいなければ何も動きません。この対策を推進し、自立的に発展させていく主役はボランティア自身なのです。

地域で子どもの保護に関する意識啓発を行うボランティア

毎月1,000円（1口）で

カメルーンの子どもと女性 5 人が、HIV検査を受けることができます

カンボジアの子ども 4 人に、1カ月分の給食を支給できます

インドのHIV陽性の乳幼児 2 人に、栄養治療を提供できます

もっと知りたい！ プラン・マンスリー・サポーター

いつもあたたかいお気持ちとご寄付をありがとうございます。今号では、ご寄付１口（1,000 円）と３口（3,000 円）でどんな支援ができるのか、プロジェクトで実際に支給されているアイテムを例にご紹介します。

毎月3,000円（3口）で

カンボジアの子ども 6 人に、1カ月分の奨学金を支給できます

トーゴの障がいのある子ども 6 人に学用品を支給できます

イラスト／西島尚美

毎月ランチ１回分（1,000 円）からのご寄付で、途上国の子どもたちを支えることができます

引き続きあたたかいお気持ちとお力添えをよろしくお願いいたします。またお知り合いにご関心のある方がいらっしゃいましたら、ぜひご紹介ください！
- ご寄付の増額（変更）はいつでも承っております。
- ボーナス月や記念日のある月だけ増額するなど、増額月の設定も可能です。

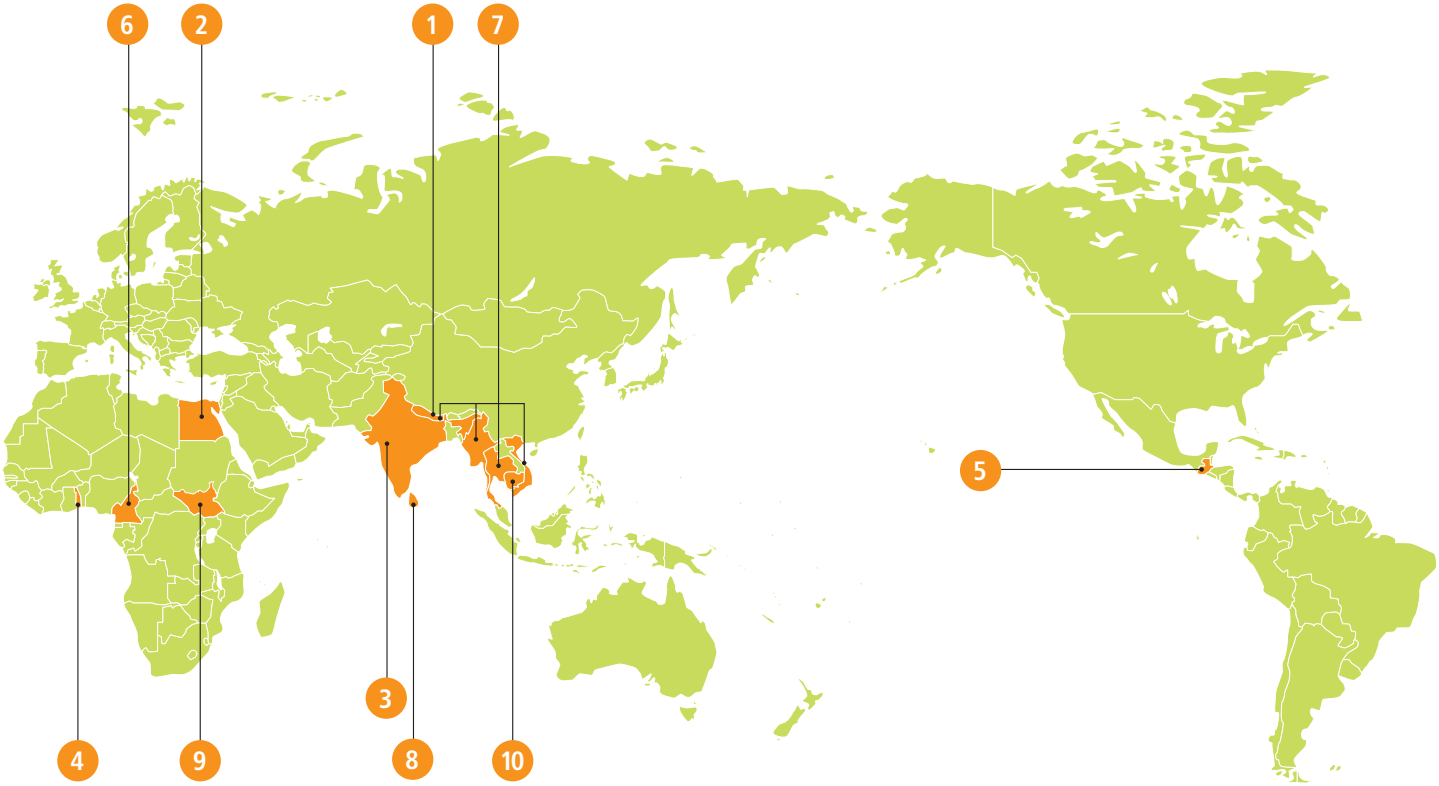
（※プラン・ジャパンへのご寄付は、確定申告をすることで所得税の還付が受けられます）

お問合せ：プラン・ジャパン 支援者サポート部
TEL：03-5481-6100
FAX：03-5481-6200
E-MAIL：service@plan-japan.org

件名：「プラン・マンスリー・サポーター
寄付額変更／紹介資料　希望」
※ SP（スポンサー）番号をおもちの方はお知らせください

プラン・マンスリー・サポーター　プロジェクト一覧

※本報告書は４月と10月の年２回発行ですが、
この２回の報告書にて、すべてのプロジェクトをご紹介しています。



カテゴリー	国	プロジェクト名
ストリート・チルドレンと働く子どもたち	1 ネパール	働く子どもたち
	2 エジプト	ストリート・チルドレン
障がいのある子どもたち	3 インド	障がいのある子どもたち
	4 トーゴ	障がいのある子どもたちの支援体制づくり
	5 グアテマラ	障がいのある子どもたちの支援体制づくり
HIV とエイズに苦しむ子どもたち	3 インド	子どもと女性を中心とした HIV 予防とケア
	6 カメルーン	子どもと女性を中心とした HIV 予防とケア
紛争や災害に巻き込まれる子どもたち	7 アジア４カ国［ミャンマー / ベトナム / ネパール / タイ］	「災害に強い学校」世界プログラム
	8 スリランカ	子どもの保護とケア及び地域社会への復帰支援
	9 南スーダン	若者への就職・起業支援
	10 カンボジア	学校給食を通した子どもの栄養改善
虐待される子どもたち	6 カメルーン	弱い立場にある子どもの支援と保護
	8 スリランカ	家庭・学校・地域での暴力防止

ご質問やご意見などございましたら、下記担当までご連絡ください。

公益財団法人プラン・ジャパン
〒154-8545 東京都世田谷区三軒茶屋2-11-22 サンタワーズセンタービル10F
TEL 03-5481-6100　FAX 03-5481-6200　www.plan-japan.org

Plan プラン・ジャパン